令和元年６月５日

福島県天然記念物ビャッコイの流水中での栽培に成功
～アクアマリンいなわしろカワセミ水族館で公開中～

福島県白河市表郷金山のみに生育する植物で，福島県の天然記念物および希少野生動植物に指定されているビャッコイの栽培に福島大学共生システム理工学類生物多様性保全研究室とアクアマリンいなわしろカワセミ水族館が共同で取り組み，自生の状態に近い流水中での栽培に初めて成功した。
現在、同水族館２号館入口の「湖の源」水槽で一般に公開されている。

ビャッコイはカヤツリグサ科ビャッコイ属の多年生の水草で，かつては猪苗代湖周辺の戸ノ口原や，栃木県大田原市にも生育していたが，現在は白河市表郷金山の湧水のみに生育している。なお，戸ノ口原は戊辰戦争の戦場で，会津藩の少年戦士白虎隊もこの地で戦っている。そのためビャッコイ（白虎藺）の名が与えられたようである。昭和 30（1955）年 12 月 27 日に福島県の天然記念物に，平成 16（2004）年 4 月 1 日施行の福島県野生動植物の保護に関する条例により特定希少野生動植物に指定されている。金山でも現在は少数の湧水のみに生育し，そのうち保護が図られているのは 1 箇所のみで，その場所でも樹木の成長などに伴う生育環境の悪化で生育範囲が急速に減少している。そのような状況であるため，環境省が平成 31（2019）年 1 月 24 日に発表した最新のレッドリスト（「レッドリスト 2019」）では，最も絶滅の危険度の高い絶滅危惧 IA 類に指定されている。

福島大学共生システム理工学類生物多様性保全研究室とアクアマリンいなわしろカワセミ水族館では，許可を得て平成 28（2016）年にビャッコイを自生地から 3 株を採集し，猪苗代町にある水族館の水槽に付近の磐梯山山麓の沢の水を導入して 2016 年 12 月 16 日から栽培を開始し，6 月 5 日時点で栽培日数が 902 日となった。栄養繁殖により数百株となり，現在水族館２号館入口の「湖の源」の 2 つの水槽で一般に公開している。

ビャッコイの栽培に関しては，昭和 35（1960）年に保原町に在住の大石俊雄氏が砂と水苔を敷いて灌水した鉢に植えることにより成功し，昭和 37（1962）年に発行された地元の同好会誌である『福島生物』第 5 号で報告している（昭和 37 年以降，どうなったかは知られていない）。今回は，より自生の状況に近い，沢の水を用いた流水中での栽培に初めて成功した。今後は株をさらに増やすとともに長期に維持することにより，ビャッコイの域外保全を図ってゆく予定である。

付記：
自生地への植え戻しは，生育地を攪乱するおそれがあるため，少なくとも現在は行う予定はありません。自生地で消滅した際には，行政の担当者とも相談しながら複数の専門家で慎重に協議したうえで，それが最善であると判断された場合，行う可能性があります。

福島県内でも，保護のため希少植物を増殖し，自生地への植え戻しをすることが盛んに行われてきました。しかし，現在では，種（しゅ）だけではなく，遺伝的多様性も保全すべきであるというのが，専門家の一致した見解となっています。専門家の間では，植え戻す際は，遺伝子を調べた上で遺伝的多様性を変化させないような個体を選ぶことが行われます。現在県内で広く行われている増殖・植え戻しのほとんどでは，そのような配慮はされていません。自生地から採取した種子から増殖した場合でも，少数の個体から種子を集めることが多いため，特定の個体の子孫が多く植え戻され，集団の遺伝的多様性が低下し，保全にとって悪影響を与えるおそれがあります。

本プレスリリースを記事にする際は，植え戻しに関して触れないようお願いします。あるいは，「生育地を攪乱するおそれがあるため，少なくとも現在は行う予定はない。」として下さい。また，今後県内で希少植物の増殖と自生地への植え戻しを取材した際や記事にする際は，上記の状況を考慮し，無批判に賛美せず，慎重に扱って頂けると幸いです。

写真１　ビャッコイを公開しているアクアマリンいなわしろ
カワセミ水族館２号館入口の「湖の源」水槽。

写真２　アクアマリンいなわしろカワセミ水族館２号館入口の
「湖の源」水槽内で生育するビャッコイ。

（お問い合わせ先）
福島大学共生システム理工学類教授　黒沢高秀
電話：024-548-8201　メール：kurosawa@sss.fukushima-u.ac.jp
アクアマリンいなわしろカワセミ水族館　平澤桂
電話：0242-72-1135　メール：hirasawa@aquamarine.or.jp